草上

石瀬文庫

[illegible]
むかしの心まつり行らんかと
そこいふ[illegible]
わくらは[illegible]
孫のかうつ[illegible]
みるの所位ハいと[illegible]
の[illegible]
き一ツの人[illegible]
ゞねりなと行[illegible]
[illegible]

世をすてし聖人なれども
つゐに時にあひてをほせを
ふせつゝいつゝみとこゝろのとゝまる口舌
法師なれどもやはらぬあはれ
人を求めたゝかひ思ふ事よと
清少納言のかきをきし事は
いまかしこまるゝよつけて
いはんとなり増賀ひじりのいはく
やまをこもりくゝ佛菩薩をゝ
たゝんとおもひ給ふ

世人の中にあるまじきことをなん
人にかたらんとおもふ所のをこれたるこそ
あるまじけれ世にしたがはんこそ
やすけれすあいこそ
おもしぬるたゝむつかほ
そこそこをのる人の心をもきをの
本性をえんとおもひ給へけるを
こゝろえむまれつよたの思なとゝ
賢をとゝ賢をとゝこゝろ
こゝろ心にのりをこゝろ
をこれ人をのりをこゝ

[illegible]

作文和方義陰陽道又有職[illegible]

人宮殿[illegible]

[illegible]

て拍子[illegible]

げこ[illegible]

[illegible]

民の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

順德院の禁中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をへき露霜りさまたれく所用さす
ほどたりさ親のうさか事のうそをを
たむよのいとまれあきこうさう
思みるれうは獨寢うこ面うこ枝
なうこうたくくれこををくれこを
ぬりれうかを夜たりてめよ夢やす
うう寸おをハまんうあうまにれ
をよりされ
後の世の事ちうこりりれす仏菩
うとうぬ心よくう

不幸よ想みつう人ちうあ
などうたうふ思とりをうを夜たうを
たうつなよう□さてまうを
なくあくくしうをうをたう夜
かり題巻平物をのうひん配所の月
飛なくて月ひんをを見ぬ
物牙のやんをなうんみをまて教を
うんみををとうよりあくてたりなん
荒中古主の糸ちを大臣花園左大臣
なうたんうをを○ひい行り梁夜の

おとゝ五郎おもきぬうゝく伊ゝ五郎の
ゝくまをはつゝゝゝ世間の
翁のわ宿りをいとゝ墨染なるの墓を
ゝ移て作り修行きゝゝをゝとゝこれ
かゝこゝをゝて子孫たゝゝせゝと思ひと
作りきゝとゝ
あゝゝ背の高ゝゆゝ四ゝく富士新山の姿
ゝゝゝてのゝ住ゝゝゝいなゝて
いふわのあゝれゝゝゝん春は乃ゝめ
ゝゝゝゝ月はきいのゝあゝのを

乃ゝふ人ゝゝゝ久しゝゝ所ゝゝ
ゝをゝゝゝ文の蟬のゝ姿をゝゝぬゝゝ
ゝゝ作ゝゝと一年をゝゝすほを
たゝをゝよゝゝゝゝゝやゝゝ住と
思ゝゝ女をゝゝゝゝ一枝乃義のゝゝ
ゝゝ世の住ゝゝぬ世ゝゝみゝゝき姿を
ゝゝゝゝ何ゝハゝゝ気なゝけきハ辱
ゝゝゝゝゝゝ十ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人をうしらんことを云ひ外のはり
子孫を生してさう行まをとゝんまの
命をたゝまし[illegible]
[illegible]のこゝかあの[illegible]あるもしす
なりいくなんあさまし
世の人皆心ゆこゝ子[illegible]を欲[illegible]
人の四[illegible]
[illegible]
すこ[illegible]
心[illegible]

[illegible]
通[illegible]
[illegible]
たゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちぬ口さうをよくしたてのよきたく
多をこつのあり俳諧壁恵のそき共の
相すく俳諧を六芸餐の楽弱あり
つくをみる肌離して作てこを中よたく
うの面白いのひとりやめうくれのそうう
老うを口さを知たるも恵明うを
うまれ仏明をみゆうこれを女乃髪
まうをよりう環よい大爺もよつるこれ
女のまけうたくさうを作まう笛うい
婦乃離うるすうとうつい作こ俳

こうう作ってうへくく作老
るよいものまこれ明
家居の作くしをたうまりこを
うものやうをは心つて興あうものなれ
よう人乃やふい狂明をう仏う
こ八うう月のそうも一きいたくを
見ゆうそうい俳めうくきうれ
うひと求をうわすりを口さとうぬ
庭乃草を心作うこ俳よまのこすいいの
たうをおくくうあう調度も昔覚て

やまとうれうこころを足ゆきを
ほく玄たくこのつをはくこをみき
たくこうのやまのうくこえうぬ
調度をなうべを花前載玄寺まて
つのまれうすつくりなやうをみう先を
くれくいてワりこてをやをうこへ
住をよみ四のまれ燈をも明りなんを
ら見うをを思をおく大るハ中四ちを
をのうハをしハうれ後速大寺の
大仏の寝殿よ弱わうやうて縄をうれ

うりまうを西行うるく弱のゆうしハ
行ほくれうれうれおへうけ辰乃南ちう
ふうりよをををこをこをハまうこを
まうをや伽よ後小伽安のおりまう
小坂殿のゆうりうや縄ををうまうう
志つでかのたりこをいうをまを伽りしよ
四をや鳥乃むまをみくゆのうをとうを
まれハ伽境れうまをおうをんと人
のうをうこうをのうをハうくこうをこを芸て
しう徳大寺みをいうれうれの伽ん

霜月の比栗栖野と申所を過て有
山里に立たる八幡宮の
前乃かたをとをしたる
なりたる庵たり其業にもあ
り栖の中くるてい所をとを
ふ所に爾加利て蕨を折て
をる寺うり給人の有まへ
うくもたるまけ
程よりの庵より相ゐ其乃
をたりうまいりを

をしくうちひろしてすちをを
こそ其なるまつのハと云しか
なりつるハ人とちやうゐ物しを
ありきをを女のをりよりをうる
くいれをこまんををれ入きよ
をる人をまけきを乃たハをに
むをををんを牡あるのやを舞
ををいをんかをの事を長をを
こくをいたるををいをうたを所を
あハ人をを秋をををを思をあをを

さるからさぞともうちかたらはゞ
つれ〳〵なぐさまめとおもへどげにはす
こしかこつかたも我とひとしから
ざらん人はおほかたのよしなし事
いはんほどこそあらめまめやかの心の友
にははるかにへだたる所のありぬべきぞ
わびしきや

燭燈のもとに文をひろげて見ぬ世の
人を友とするぞこよなうなぐさむわざ
なるふみは文選のあはれなる巻々白氏文
集老子のことば南華の篇此国の博士
どもの書けるものもいにしへのはあはれなる
事おほかり

和哥こそ猶をかしきものなれあやしの
しづ山がつのしわざもいひ出つれば
おもしろくおそろしき猪のしゝもふす
猪の床といへばやさしくなりぬ此比の
うたは一ふしをかしくいひかなへたりと見
ゆるはあれどふるき謌どものやうに
いかにぞやことばのほかにあはれにけしき

おほゆるハわれし貫之か糸によるものなら
なくにといへるも古今集乃中の歌なれと
やハり作者あれとい此の世の人の
よくしらぬ事ならはみてす我の世界
うるはしき詞はとものとおもひ
此ミちにかすくいひそへられたるも
ありしは源氏の物語になけれは
とゞそけり新古今に入れる松の葉に
さびしきやうなるさまをつくれるそ
ゆてふほにしくるゝけるよもや

見けれしとものゝさまを衆議判の時
よろしきやうにありてはことさら
感し作下されまうしは家隆の花は
かゝり哥のさのみすかしへよこうすゝめぬ
などいふ事もあまたいさやしてとよ
あつるおもし詞哥枕をむしの人氣
よろしハさらよおもしりのよあらすや
まくすゝめて深もこそよまされ
もうく梁塵秘抄の郢曲の詞
こそ文あり宋れたる事ハおもひ出れ昔の人

たいふいまてたうちとうを郡
いたりくこうちのや
ゆくみをあまさ志り　栃たうちうそ
かこむかうまれうのりをもくこ
見たりきぬなうひうの形山里をいを
かなれぬ事のこうおりうの都へたを
もとうてよやうそのうの仮宜り
つまれなとうひやうを義をおくけ事
うの所ようくうよりよろりを心づひ
きうれもてう調度まくよれはよく

能あるうかうよれうをうをはを
をうう見ゆまを寺社をうを参ひをり
をうをおく
祈ぐ示うなうれうくおうをれ
おううものの友笛笙篠つを
こたよを琵琶和琴
山寺よりれをうを仏り作うまう
うつまくをれくれうのかをりを言
よまうかうれ
人をの事を作まやうしおをりを

退きて賊をもち寺を焼むさかりこれを
みてうるをよむ　しきりもちさ人の
こうきまれせもろもろ行由とし
作る人ハそうよりみさうつたくこれを
なくて水をもりてさけく飲けるを
見なりひろこしをものを人のえを
ありけをを或時木の枝よりをたををうう
風ようをて吹けるをこうの風一やく
をそつみをよむをしてう水ものこをう
いかをををのうら涼うをく孫暑を

冬月ふ食をくて豪一束ををうをを夕ふ
ををよみ　物よハむをめをりもろもの
人ハ是ををみと思へををををををを
そを春をりを作をへけめをれりの人を
うりをつをへ
形ものをりうをうをうをものををう
家をれもあるれハ故をう風をれを
人をよををををををををををををを
と二をハ四ををれををの氣色を
をうあをれをの形ををををををの

書つけてのちやうの日記より垣根の草
もしもの比なりやいまは露のうちく
花もやうく咲こぶつかなつかしあき
れしを面影うつして心あるくしく
ちり色ぬ青葉より紅葉行まくよろかる
心のそこうあまきすれ梅ハ色そ
おへまきあれ梅のまつ
月を立つて恋しく思出れ山吹の
こゝよきそ数のおりの紅の水鶏の
をつくおしいまてこゝうあれ瀧

佛の比叡の比高野京玄精渕きり
新り拾く行こう春のあれも人の意ふ
を因これと人の作りけりこゝきよろ
おなれ五月あやつて比丘尼こゝ比水鶏の
たく鳴と心かそうぬハ六月玄ろ
あやしき新うりタ月の玄ろくみて
蚊遣火ハ物をあれ鳴り六月扇
又おしこ七夕まつこゝあまりけき
やく長きよ鳴ほと有明くこゝ比
萩の下葉多くく行日田うまあ寺を

とりあつめたる事ハ秋のみそおほかる
又野分のあしたこそおかしけれいひ
つゝくれはみな源氏(げんじ)物語枕草子(まくらのさうし)なとに
ことふりにたれとおなし事又いまさらに
いはしとにもあらすおほしき事いはぬハ
腹ふくるゝわさなれは筆にまかせつゝ
あちきなきすさひにてかつやりすつへき
ものなれは人のみるへきにもあらすさて
冬枯(ふゆがれ)の気色(けしき)こそ秋にはおさ〳〵おとるまし
けれ汀(みぎは)の草に紅葉のちりとゝまりて

霜(しも)いとしろうおけるあした遣水より
烟(けふり)のたつこそおかしけれ年のくれはてゝ
人ことにいそきあへるころそ又なくあはれ
なるすさましきものにして見る人もなき
月のさむけくすめる廿日あまりの空
こそ心ほそきものなれ御仏名荷前(のさき)の使(つかひ)
立なとそあはれにやんことなきおほやけこと
しけく春のいそきにとりかさねて
もよほしおこなはるゝさまそいみしきや
追儺(つゐな)より四方拝(しはうはい)につゝくこそおもしろけれ

つこもりの夜いたうくらきに松ともを
ともして夜半すくるまて人のかとたゝ
きはしりありきて何事にかあらんこと
〳〵しくのゝしりて足をそらにまとふか
暁(あかつき)かたよりさすかにをとなく成ぬるこそ
年の名残(なごり)も心ほそけれなき人のくる
夜とて玉まつるわさは此比都にはなきを
東のかたにはなをする事にてありし
こそあはれなりしかくてあけ行空の
けしき昨日にかはりたりとは見えねと

ひきかへめつらしき心ちそする大路(ち)のさま
松たてわたしてはなやかにうれしき
けなるこそ又あはれなれ
なにかしとかやいひしよすて人のこの世
のほたしもたらぬ身にたゝ空の名残(なごり)
のみそおしきといひしこそまことに
さもおほえぬへけれ
萬の事は月みるにこそなくさむもの
なれある人の月はかりおもしろきものは
あらしといひしに又ひとり露こそあはれなれと

あるひ　てあり　けきあるよりれて
何のはあるれなるうごとん月花はこそ明り
風のこころ人よりはつくられ岩よくるけ
そこよくなるかの水のこれなるそこるれも
ひかけそこるれ流日夜東流去悲人の
たるよこそまること少時も留まるといるれ
詩を見侍りあるれなるうあるれ無康も
山澤よあそひくく魚鳥をみまこ心たのふ
といり人きく水まきよれ所よ居れ
たりきあるうるを心なくこれ山なれたるし

何なるうき世のうきたるうきき
しやいとよりやくくそ所いくく後
切まるのたくそ作まるるくら
るはものも古代の姿こそおうと見ゆき
文玄羽なそ音れ及古るるはいみき
たるう詞をくるおううそ明りあく
格くなれいみへい軒りるけよ火うけ
よとそのりをとやの人はもてあまよ
るあけよやそいる毎主殿寮人枕そと
るるよをたるあ　たるくやよるい

最勝講の御願所なるゆへ
ろとうりつをかうろ
ゆうきんをおかせられ
おとろへうせ水乃世となりて九の
うち乃ちかろ乃ちかろ
おれ露臺羽飼所殿行門をいと
やもしきこいて　たやしの所ともをめ
小郷小板敷　宮遣戸なとそてうを
きこいを陣うの儲やとうう
いけを長沢殿のをなりをし
うりよりというみそてうと郷の深そ
事おこをふ乃ハうり諸司乃
たをんうりうるをれうを
おうさたりこれをけうを
うりをよりぬうろうをおうけま
内侍所の御給のをなそうを優なう
をの物りうそ徳大寺のおわうをおうを
おわせうをけ当
新宮の野宮よおうり　寺あうこ屋を
やうくおりうろよ事乃うりを

受しの短冊なとい全なこうの紙
なとしをあつをおりをして非の社うう
をてうくなるとのうきのなれや
めりうう森のをしもたるなを
玉垣志ましてさのまよりけうう
なとしをうぬうはうをおうきは
伊勢 頃成 吉日 平盛 住吉 藤
安布彩 吉田 大原野 松尾 梅宮
兎多門の潮御作をぬせうあまば
河うり事うなのしひりひ

いこうしてあるやりしあうりを
人をぬ野うとありうぬをみうは
人あうたまりぬ桃書をのいをねは誰を
ゝをふう昔をかうんまりてみぬいみ一の
やんうとおうをきん祝のをういをうりを
京極廃法成寺をるをうをを志うをり
中衰しをうりはるをはは西堂殿乃
作りみうせをくを庭園おりをよをうを
四つ西ううのをみうをの西ううを垂衣
うをの水を作ホるをてとおりをを河

いっきん世ゝをかりそめあ世をてんとハ
おもひてんや大門金堂なとちゝまて
ゑしゝとゐおもの比南の門ハ焼ぬ金堂ハ
そなをもれ物しゝまゝみそらをゝ
日をもり三重書院ゝそゝそゝそゝ
物りゝゝ丈六の佛の新いゝたゝゝくゝな
ゝゝひおゝ寺行成大納言の額ゝ
ゆゝゝゝ廊あゝやゝゝ見ゆゝゝ
あゝれ物ゝ法華堂ゝをゝいまゝ物ゝゝ
見をゝりまゝてゝ行ゝゝゝゝゝゝゝ

なゝ物ゝ所ゝハをゝつゝゝゝまゝゝゝ
物ゝもあまゝゝ物ゝふゝれゝゝ人ゝ物
ゝまゝゝよゝゝゝ見ゝゝん世まゝをゝ
ゝれてゝゝゝゝれゝゝけゝ
風を吹あつゝゝゝ人の心ゝ花ゝ
なゝゝゝ月をゝゝをゝれゝゝゝし
ゝの業ゝゝゝ三まゝゝゝゝゝゝ世の
ゝゝ成ゝゝゝいゝゝ物ゝ人ゝ物ゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝまん事をゝゝゝゝゝゝゝゝ

日の事をなげく人をたりきん
堀川院の百首の哥の中より
むしの音をいとをかしく孫にあきよりの
はてまれまれの墓のうへてこひし
くもの音のかなしきかな
門國ゆきの節會おこなはれく御畫
門侍所のつとめをはりぬ
つかさけき新院のおとゝ藤原のさ
よまぬ竹けうとや
ゆきのまやつこをみて
りうきの夜をりたれうたしく今の世乃
たゝしけるよまれ院夜毎人を
をもひ乃りうきの物りを人の
つゝたりしれ
涼國の年たりありしなる事ハあり
侍廣の出所の子孫なを板敷をこけ西の
出羽をとりて布乃もうたくしく出
祖父ををもふ人の作をく
たゞ平緒まくをやうゆ
たのかりをよろけ西みうの

ゑ一このごろ世ゝの人ゝまてゝは
なをさ長乃まさひしり何とあさくそく
うりしるゝ路一をゝと思反古なを
やとまとゝ中よりはさ人のよまゝい絵の
こまゝゝいゝゝ見ゝゝゝたゝこゝゝりの
つゝまれ世ひあゝ人のゝゝ長くゝて
いゝりゝゝりゝゝゝの年りまゝとおゝゝ
あゝれまゝそゝゝよまゝりくゝなゝて
つゝをりてゝゝすゝゝこゝゝゝゝ
人のりゝ跡ゝゝりほこゝゝゝ中院ゝ行

山里なゝゝゝゝゝゝゝ侍ゝくきゝゝ所
ゝあまゝたゝゝゝあゝてなの口ゝゝゝゝゝ
あゝゝ心ゝゝゝゝゝ月数のゝゝくゝゝゝ行
おゝをよぬゝての月はゝゝなゝ何なゝ
たゝりゝゝ事ゝをゝ物ゝこゝゝ
物ひゝゝゝゝりくゝゝゝあゝゝぬ
もゝすゝこゝゝ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事ハゝゝゝくきゝゝくゝ事ゝを
あゝこゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人の心はかうしておかゆき年月経ても
昔忘れぬものと去りのハ月の
うちにやいつるもとなれハこゝ
ハてりハ光てぬるやうに明る事
つゆくさしもいぬうちをけうち
山の中りおきうてさうへ三日たり
まうて行こうきハ程なく卒都婆も苔む
赤葉ちうつてゆ夕の嵐ハ月のこう
ちうぬるすりきうおしい出さた
の人たちんなうたうのうちをみ

頃なうちをすつうふ日たりの赤くハ
あうれうハ心ふこうきを孤ふ口さもう
えぬ事及ひうきの人とうゆうこうすう
年しの事の事ハう心あうれ人あうれを
月うへうをうをて嵐よむきうり松しよ
色をきうて霜たうぶううこうれうう墓を
ちうれう田とりうりぬ井のうこうたうなく
なりゆうそううしうたうし白人みを
雪乃おりうう三うたうて文をゆうして雪乃月
いつう事うてう

行たいをうしなひ重いて月ろくを
一年のうちまゐぬかのをうしうに
人玄作の形事ニて八きゝハうをて
日ハ女ハ四月ハりとゝひをうをて
おうしをしうとゝひをうをて
うをうをの事も四月をれをり
九月ハ日の比ある人ハ月をれをり
ゆうまて月見たりしてを物ハ
出ろ所たりてあるいきを聚て八行ひぬ
あをうを庭の蔦ちけうをハをうをぬ

白ハりをうをうをうをうをのいをる
きをいををあをれハりをれ程をりて
出行ゆれを物をを所の優をりあをり
ものをうをれをををうを月見をを妻戸を
とをををあをて月みをりををり
やををけをりまをハ月ハりをを
祝まをうを人たりををいををうをん
をの事ハたを夕のをををををを
よをををを人をとをハををを
をををりし

今の内裏作りをせられて有職の人々
尽されしなれは作を範りとして院よ
遷幸の日ちかく成なれは玄輝門院縁
して閑院殿のくりの穴ハまろくいふも
なくてありたりしと作りまゐらせしかは
なり是ハえうの人々来りてわかちをさとる
けしきをあやしまさせてみなおどろかされけるになり
甲香ハ初ら貝のやうなるちいさくて
口乃かたのかたちなかりしを世にある貝の
うちわり武蔵国金沢といふ浦よありしを

所の者ハへふくりと申侍りしを
見れはまことに人をたのみて文のなかにすいたう
よし見るをしらて人々りつてまめなる
ふさし
久しく鬼伝女比ハつねにくもらしむれと
口かをとりかくしられて名家のなき
やうきかりし女乃ひそかに仕丁やある
かうなりしかはそれをまなひしたうて有しとく
うれしけきよりこゝろをはたらかせる人のうはさと
人の申侍りしこともあまたある事也

知り人にてなくるれば人のこゝろあり何
物よりもこれ行くろこゝろ見ゆるこゝろ
と変うくやはらかとこゝろ人もこゝろぬへ
物書よくまくよくまくよくこれ人にそはゆる
うこれ人のうこゝろ何こゝろ見ゆるこゝろ
又ゝとおもひつゝきぬて
名利（みやうり）ゝ人ゝ物ゝ
一生ゝ人ゝ物ゝ
けまて身を何ゝ
物をまねくなゝ

金をて小斗（かと）をさ物ゝ人のこゝろ
ゝ人ゝ人ゝ
よゝ
大物ゝ車（くるま）肥（こま）ゝ金銭（きんせん）の物ゝ
ゝ人ゝ人ゝ
金山ゝ
何ゝ人ゝ
ゝ物ゝ
ゝ世ゝ
ゝ人ゝ

をろかなる人をあなどりまれなるあへ
たる位なるものなりをこがましき有
為て是賢人聖人につらつらかへ
位よりも時をあやまるをやみおかり
ひとりたる人位を望をつたに
愚なり智恵と心とをうしなはるを
養ものをさまりしこと
かまをを生ずるハ人のやをよろをなり
ほむる人をほめんとをせるをまをす
なくこと人をすゝうり去て

誰とのハち誰りうたるまんを我のうん
養ハ又誠のをを知りて外のなのをなりて
更よ益なり是を弥ふをろかなり
たゝし志ゆく智をとをを賢をのよ人の
なるをいを智恵ひををつりたを
大能ハ如愚の陽長きを知りつをてを
学ひをををを孫の智よりすいををを
智とをつをを可不可ハ一際なりいをを
とを善とを因をの人ハ智をを速をを
功をなををを孫をを孫をを

これ徳をうくる道をなほさんとす
なれども賢愚得失のさかひをもこれハ
なり反りのもとをもとりて名利の事を
をもふよ不くのこと第一ハ皆非せい
なるたるすべきを
或人法然上人ハ念仏の時睡ハをもこれく
行をこころを物ものいとして往生をり
やの物ものとやれハ同のさとりにほを
念仏一行へとも往生ハ一定とおもへを
たるとこうを行

一定不定と思へを不定ハりこれを
をもれもたるこうしをなるを念仏
をを反往生をこれいれりをれを
たるこ
同信同ハ何乃人ををやいの者のむを
こをこをしをて人あをいハこう
けをを共むをあこを栗をあを食て文ハ
ハのをこをこをこをこをれをこれ
こをやのこの人こ反りをれをこれ
おやゆこをを者ハこをはるをて

五月五日賀茂の[illegible]へ馬を足ぬりしよ
車の前より雜人へ立へてみてゐ[illegible]
谷あるところ[illegible]のきりよりとられこと
人おかく立たてをへぬへきやうをな
[illegible]れ[illegible]むかひ[illegible]ものすり
法師のかりくすのまきりついぬく
わかたりをつよりいかり[illegible]
[illegible]ぬへきやうをこなす事度々[illegible]
[illegible]をみる人あるさりたきみく[illegible]
[illegible]ものれかくあやうき枝[illegible]をそ

やをそ心たりをつにんよりいとり
[illegible]心よりをしまきよ我かの生死の
[illegible]ゆよあんをれを忘てわ足
て[illegible]をすをろの[illegible]事ハ[illegible]まこり
[illegible]ものをとひたれおり人をを
[illegible]ようひをを[illegible]をろるひを
[illegible]をを足つをもへを
きをまへをを所をこりくよひ入物を
うかものをとり[illegible]なをひをこに
なをををあをを思ひぬをして

胸よりあらきまろやかなる人まなかなる河
とりておよそ感ずるまろやかなる
唐橋の中将といふ人のまろ行雅僧都と
義和尚人宏阿闍梨とまろ侍有りて氣のあるる
病ひまろく年のやうくたくるほとり
鼻の中まろく息も出るかなきを
高くよりまろ侍りて
目眉額はも臆まろ侍りけ
あもすすこの鼻の面のやうに見
きろたをそろしく異のまろ成く

目いろきのまろ侍るものかと鼻
まろ成はてはハ坊のまろの人まろを
みをもりまろ侍りて年ひまろく侍りく
はまろ侍りて出まろ侍りまろ
やまいもあるまろ
まの鼻のまろ侍るやうまろ
おしまろ侍るまろ
まろ侍りまろ侍りまろ侍るを
まろ侍るまろ侍りまろ侍りまろ侍る花みまろ
まろ侍るまろ侍るまろ侍る
まろ侍りまろ侍りまろ侍りまろ侍りまろ侍る

妻戸のもとに立ちて寺のやぶれ
たるを見るにうちうちに明かる男ども
たちうちとうちとけたるつらつき
ひとりの男にて枕のうへうちを
うちひろげてゐたるいとうつくしき人
あるべし竹のあをとをいとを
ひきまぜたるあをいろなるに
やうやうの物ども指櫛などもよきを
数へつくしてやうやう童
元ちりをくりてすぐるに田の中なる
うるをを稲葉の葉ひろくなりつつ
なを留をえるすゝぶをひとつあれを
すぐるを人もあらしとこそ思へ
うるはしきまほしくをとりて行て
留をかきやうて山のきはに
らよ入ぬ榻よりそなる車の足ゆるを
をはめるをもちしきをを人り
をへでをのうへ宮のたてまつる
かく仏事などをとりあつめ

御堂のかたに法師とも参りたり夜寒の
風にさそはれくるそらたきものゝにほひ
も身にしむ心地す寝殿より御堂の廊に
かよふ女房のおひ風用意なと人めな
き山里ともいはす心つかひしたり心
のまゝにしけれる秋の野らはおきあまる
露にうつもれて虫のねかことかまし
く遣水の音のとやかなり都の空
よりは雲の往来もはやき心地して
月の晴くもる事定めかたし

公世乃二位のせうとに良覚僧正と聞え
しはきはめてはらあしき人なりけり坊の
かたはらにおほきなる榎の木の有けれは
人えの木乃僧正とそいひけり此名しか
るへからすとてその木をきられにけり
其根乃たまりけれはきりくゐの僧正とい
ひけりいよいよ腹立てきりくゐをほりすて
あまりなれは其跡おほきなるほりにて
たりけれは堀池の僧正とそいひける
柳原の辺に強盗法印と号する僧有り

[illegible]隠遁よあひうらかれり世をを
[illegible]
或人清水へまゐりあるよ老うの尼のゆき
つるこをきうのうさこけうくさめくやい
いかくりけをてを隠居おの何事をくい
のうまうと宮ゐれをいうへを世事れ
いやまうりけうをきりくやきをれく
うをうをうてやこれけうの可うく
まりあうをを出めうをりをを戸勝を
やうをい出乃法御山うり児をおり
まううをもやををい行うんとこへを
うくやううりとをいりりりううを
をうをこ明りんうり
光親の院の最勝講をしてをひ
うををを行おへうをれく仏門を出をれく
くを勝られりをてくをひをしうを
御童をを寺の門へをまうを出を名
を房あるをこれ誰よられをれとを
あれけをを獄のうまいやんをを
を明りとをを國をを勝行ひうをを

光明寺に始て参りを行きんと思ひ立
なれども墓所は遠く堺なれば
そうそうよ病をうけ
寿を延んとすれども
延めうるのあるまじき事は
あるまじと云は他の
まへの事をゆるくまへの事を
いそぎて思ひ事の
何物ぞいたんや人は
をまりめうるを
まと思ひきめり
ふむりをすく佛
仮名のなりこんは
人数多く自他の要
と火急のるを
耳をつこく念仏
ゆと称名十回
ひ一日はあまりよ
事と思ひ
なくさいすくまり
まと思ひきめり作るをうけ
ふむりをすく佛をつとめるを
仮名のなりこんは音を多く
人数多く自他の要を
と火急のるを聞
耳をつこく念仏して
ゆと称名十回より
ひ一日はあまりよ
事と思ひ作
なくさいすくまり

應長の比伊勢國より女の男に成りて
めでたかりしとて事ぶるまひ共の比
六日ぶるまひ日ぶるまひ京白川の人見物して
出家して所々西國寺まゐり給ひし
まゐり院へ参りて二人ゆかせこしよ
なとしひあつり西さいぶるまひをして
人もなくぶるまひをして人もかりと下
の見物事のこしいやまうの比東山
よりて安居院色へ西へ伊勢より空系より
うち物の人これかをさしてたりる

一条室町より異行りとみてを行つて
とまで出門色ぶるまひやまた院の西接待の
あるまこうよりかりうつもあるす立ち
参りてあく弦打ち事なたうこうりそ
人をやまく見ぶるうおりあつるの
打ぶるまて示くぶるまくこうてぶるまく八間
降おりて清すし事共たりうう
ぶるまを一なへて二百人のぶるまを
物をを彼見のぶるまこ出ぶる
をぶる今打ちまぶるまく物人も伊りし

亀山殿の南池より大井川の水をまねきて大井の出民あり水車を作り堰入れ水をおくるのたりとなして
数日をへてまねいてかの所にまねきよせ
おろしめくり作りれをくなを
けまとし終り面りていとりよりより
作りて宇治の里人をかりてあらし
堰られけまをやまりのようひきまいせ
ちをくるおりよりめくりあとこ
いる事をそうり言り参りことを

去年のいやんを以ものあり
仁和寺よあ法師年よりまく石清水を
をりまりけまを心ゝ学をあ時
思立たひとりかりまをまを作り
極楽寺言語ををみをうたりと
いをく四よ作りりをの人よあて
毎比思作りをたをを作ことも
已てたりををおりけまを毎
多人をを山へのりしを何事ゝ
くんいりをと祈へまいりを

かいなれとおりひく山まてハ見えとう
ひらすこしのすりも先達ハあり
まほうき事ハり
是も仁和寺の法師童の法師よりあとを
まろ名酔て名あるよ事を名りよ酔く
奥よハあまをとるとうりハりたりうちへを
うてハうりうきくれをつまるやり
ハりを母ををひりそうりをとこハて
京出るよ清水奥ハ事うりハり
出りあるく夜ぬるとするよ大る

ぬれず酒喜ことさうていうきんと夜
ちりとくまれをくれのまりを
て血うりたをを瞳みるく息を
つまをけをてうるんとすをとたわ
をくりをすりをてたるこうをけをて
うをてをハこりハりてこたりなれ
ハりのようをりをうけをよをを
こ杖をハり変て京ハりくをりみり
ハて行けりをけりうを人ハたハ三ハ
事をりハりハりをのりを臣ハを

むいみょうの人たちを撰ばせられ
けりけるおとこをもとめてあり都よりおくれ
こさせすべきことにあらずとみてすぐるべ
きをもつてもれりといへども仁和寺へ
ねてさきこしのあるべきかぎりなくまくらよ
りをもみてなきかなしみたまへども
見しすべきにあらねばいとやう
たましい耳鼻をそぎ命をたすけ
なとうしなはんとかをそぎ切り新
へそをまりのごとくをまりよさしいれ
ゑを頭にもちをうを門にもちをよ
耳鼻をけずりをるをまりぬをよりをうを
鼻まきまきく久しくやをるをり
御宮よりの子児のたりきをいそ
ぎをひいてあるをりんとたくむ法師を
見て能あるたちをいはれるとかをひく
風流の破ごやのあるのうちをいるを
いそぎをいのをまをのよををを入を
ををりの器の俊をををををををて
聚をしをけれを思をぬを所ををを

西所へまゐりて児をとりそ
ゆうれいと心のうちにこあるひ
めりてをりて若れ出るようみて
いるうちにごうしうれあるれ御業を
たれんもれ弟あんん信うい
心うまよなるいりてうくうをり
まれりまむみて数珠をまり
をしくなりいて明うきいるて
ゆうまいくまの来をうきけれを
りやくおをみてすれの多ひうわ

とそかりぬとをうを山をあるれた
なるをりうをきうを人のををく
西所へまゐりうまよめるりを
法師れ云の来なくうをやうくひ
をたうて母よりあまをよ異あんと
まうりハ必あいりうをの明り
来のつくりやハ裏をむ○をまて
冬ハいりの所をまをあけこをう
且うを住居へたへうこをうをあハ
涼まをしあさうくををうをあ

まをしこまうけるおとをみるより戸を
鄙のまうけもたうし　天井のたうこハ
冬こむく燒くし　造作ハ用ひよ所
とつくりとなるをもとりてくまして用よ
を立てはしとうしの用るめあひ物
ひくしくつくつくあいうしの所
よりつくこと報くよりはりうり
作くるもうあいなれへそなるか
まをの人も組へてみるハ
つきのの人あくこなよ立いそを

きをたをつくまをそいたもつよあをを
おりの鳥をくをよるうしの人のおるすハ
人あまをあまをひをりよむこをいるを
をあつくの人もこをくよくをあまをよるを
人ハ祖をくあまをるの中よるいそを
乃るのみやをおりをるをハるをおりく
をひのをるいををおるうりおりい
事をひをくいくを鳥をあを鳥なれ
のをひてをくひるうをるの組
てくをあの人をみこなのるたり

用ある人ハこゝ事なとこゝあつる
あつ子を引けきいひもらいをひ
人恋かゝり出るゝ方御の子ひわる
ゝかいまれれこゝをもちん人ハ
子とおりひきハゝしまつきを
もしらぬそのわ御しゝゝゝ
ゝゝゝゝ
を心あゝハ住居ゝもよしあり
人まいゝゝゝ世御初ゝんゝ
かゝゝつきゝハをいゝなきゝゝ毎

志ゝぬ人ハ世をゝゝあきゝ
生死を出んと思ゝんゝ何の裏ゝりて
朝夕君ゝ行ゝへゝをゝゝみゝゝの
ゝゝ降ゝゝん心ゝ頼ゝゝまゝゝ
ものなれを困ゝてなを行しゝ
ゝゝハゝ人ゝ子山林ゝ
ハゝも餓ゝゝ子をゝしゝをゝゝ
ゝゝあゝまゝゝゝをゝつゝ
毒ゝゝゝゝゝゝゝたゝゝ
ゝまハゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝ申しこうをたのうはかりのはをくし
なぐさんハ貴下の事申りこうり
一こいるをよくをゝ奇ぬをゝん人たゝい
のをこたりともいつかいあゝ人の貪欲
あるをうまゝ寸紙の衾麻衣一
所まうけあっをのたりおいくゝこう
人のたくををゝんもむれ所ハやまを
を心をやゝりやしかゝりまゝ
所もあまをゝをを悪よゝうを喜ハ
ちゝたくゝをのをゝ人をまれを

ちをゝよハいうをもして奇ぬのうまんを
ゝうあゝまりをれをゝうむゝるれ
ゝ申ゝつとゝて喜想ゝりををむゝをゝんハ
弟の高鄰よゝをゝ所たるまゝや
大事をゝをゝたゝん人ハ去ゝゝ心ゝり
ゝあゝんまれかいぬををゝをゝをゝ
をゝ人ゝ申ゝりゝ申ゝまをゝおゝくゝ
の中ゆ佐しをゝをゝ去ゝのゝ人
の羽やあゝし行末範をゝ去ゝゝまゝけゝ
年九もあまをゝをゝたまゝをゝ事まゝん程

あしわこはうしかりぬやうなれと思てん友
えばうぬ事のこいうかりかりく事共
つくれあうりをけく思立日も有へうす
ありやう人を思うよりたち心あうきて
みるはあうまうを一ぜいをくうれ
ちうれ火なうよみうう人はたりうやつ
ゑたうをくんとまれを恥をうつえ
賊をを捨てのう後うう命ハ人を
まりまのうハを考の弱う事を水火乃
きれうをもすこやうよみれうこうあを

こを吋老うう親いうこれなうう君の恩人
のうをけまてうしをくうこうんや
高齢僧都ってやんこれは智者
たうきりいをうしうこうあをうをくれ
ほくくひうり談義の座うもあうう
りう沖ようりたくもりくひうあをう
をれうくひうをうあををうみ育り
りうう事あうりハ七日二七日なや
療治うく閑居く心つやうう学うを
えうひてうふあうくうりく苦患病を

いとしきり人りくはまる事ありしに只管
のこうらい行きいたりきはしをなる
師匠法師に二百貫と坊ひろいを
いつりたるを坊を百貫よりとて返是
三万疋を学しらべたりと定て京ゆ
人よあつまりをりをく十貫つゝりよ楽て
いとう屋をこゝろかりすゝめ寄ゆ
みたを用よりちるゆゆきをたゝ
られよりよりゆ三百貫のものをまこ
ゆよまゝ寄をく不くたゝひ行屋をゝ

ゆきをこゝろ心者ゆ
ゆ法師をみく
つをたゝりきをゝ
ゝゆを我をしゝ
此僧のゆよゆ
ゝゝちゝつゝ
宮通舟説人よ
寺中ををくゝ
者ゆゝく思ゝ
ゆゝゝ人りを

ゆ人ゆ行屋
ゝゝゝとゝゝを
屋行ゆゝと人の四けをは
ゝゝすゆたゝゆ一つて
此僧をゝひ行此僧
ゝゝ大食ゝく雑書
ゆ法行られて
行をゝ
者みく弟自由ゝく
ゝゝゝと仏事ゆ

出仕して養膳をふかく心をゝ人の前
まゝにまゝをまゝにまゝ手ワの前よりまゝ
やゝて獨うらゝ[illegible]てゝ
作いまゝて格よ作りゝ[illegible]非時を人よ
元ゝゝ定てゝ[illegible]手ワゝゝ[illegible]
衣なゝりゝ曉ゝ[illegible]
晝ゝ[illegible]
人のゝ事ゝゝ大事ゝ
衣ゝゝすゝゝを[illegible]てゝ
ありゝなゝよの作ゝ[illegible]

人ゝゝゝよりゝゝ德
のゝまりゝゝゝや
御屋の時御おゝ事ハ定まゝ
ゝ寸法胞衣ゝ時のまゝ
ゝゝを[illegible]下
ゝ事おゝゝ本說ゝ大原
里ゝゝ寸ゝ寶蔵の繪
いゝき人のゝ過ゝ
ゝを[illegible]
延政門院ゝ[illegible]時

院へまいらんとて門を
出給ふ所に
牛の角をとらんとて
はしりかゝりたりけり
おりはまいりて出給ふ
後七日の阿闍梨武者とあつむらの中
とや盗人よりあひて宿直人を
ふせくとしくりけり一度の御
供中のたゝかひ
吾をかちあんずるやうぬる也

車の五緒ハうるすゝ人よりすなを
つけくらうしつるぬり色ぬれ
のうるはりうるある人作りけり
けいの冠ハ昔よりふたくりけり
多りけり古代の冠掃とかうる人ハ
うるをつゝくしと用ゐけり
思本関白殿盛りけり紅梅の枝よ色一双を
そつくけ枝りつ手くまいりすゝ
内宴御下毛聖武勝よ作りまこと色多よ
花よ色つくりまへ作りて一枝に

ゑりかたをあらためすとゝかけまハ
腰ぶくろゝ人くよこゝ勝行くゝ
武勝よこゝたゝあの者の思ひ入やうゝ
かけくまゝゝ勝よゝ作ゝ者ゝゝ作ゝ
花もゆよ梅の枝ゝ一つを作ゝくまゝゝ
ゝゝ武勝の戸作ハ業の枝むゝのゝゝ
つゝゝたゝゝゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝをつく枝のゝゝゝゝ七尺或ハ五尺をゝ
ゝゝゝゝゝ枝のゝゝ多をつくゝくゝゝ枝
ゝゝゝ枝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二所作ゝゝ枝のゝゝゝハゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ牛の角のゝゝ
たゝゝゝ神宮のゝゝゝ枝を彫ゝゝゝ
中門ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの石
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
彫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よいむしとよる事なれて此鷹飼より
たつよしなるへしとやき
花に鳥つけすとはいはれぬ有ん
長月なるまゝに梅の作り枝に雉をつけて
君かためにと折る花ハ時しもわかぬ
といへる事伊勢物語に見えたりつくり
花ハくるしからぬにや
賀茂の岩本橋本ハ業平実方也人の
常にいひまかへ侍れハ一年参りたりしに
老たる宮司の過しをよひとめて尋侍
るに実方ハ御手洗に影のうつりける
所と侍れハ橋本や猶水のちかけれハと
おほえ侍る吉水の和尚
月をめて花をなかめしいにしへの
やさしき人ハこゝにありはらとよみ給ひ
けるハ岩本の社とこそうけ給りおき
侍れとおのれらよりハなかなか御存知
なともこそ候はめといとうやうやしく
いひたりしこそいみしくおほえしか今
出川院の近衛とて集ともにあまた入たる

人ハ門ニ出る時ニ百首の哥を
よみくの二月社の傍の水にて出く
高らかに詠よんと思ひ登りて
人の口にあるものなり
ひとく人ハ
筑紫に東ふりの押領使なとしてや
あるものなりなるものを
いみな業として
ちよ二月やこくく
ちいる事ひとしくなりぬ或時
館の門に人なきときのあをりて
歌襲殊ほくかごとせるふ館のうち
無二人にて
日暮ちをみて
きよおわしく
ちかりし
ハいつ
人をのうく
うちたのもてあこ
作ちあかりよこ
ちかりしく
もたりきよう
書写のこ人ハ法華讀誦の功つもく

六根清浄なる人なり樹の下屋な
立いる袖けるよ豆のうをたるべく豆を
煮きる豆の作りくとあるを炊けきて
うううのをのきしをうく物を
煮てうこうの足をのれをいり
たうまめうのうくとなる豆を
恋心をとるまの人やいかてを
堪うけきたちうあるせ不くな
うこと行ううこうもうきう
元應の清暑堂の御遊よ玄上はしに

菊亭のおとゝ板馬を障紙きるよ庭よ立て
先様をこくうゝ袖うをなしてひうあるよ
くりゆうをうをうをもう紙うう
みうつうらるけきを祇園のまう宿よ
よくのくことはへうをくりいうあるぞ
越うたりきんお足けうこぬうき玄
ようくたりてあるのやををたを
きうやう
えをやうやて面部をいをううあ
うきうを足時ハ文の物を思作きの

ありし人のようなれむ　ゝ　わらうと
すても此北の人　其夜そこかとまくう
ばりきんせ　しと思ふ人もしと思ふ人の中よ
思ふてつれ　ハ　雖　もうくおかゆるや
みいつなる　ものうそ　人のつまめり
みゆ　わを　ものうもゝ　れ事の
ゆうやうなる　ーうやをおもてゆ　ん
思出ひも　ゆこ　てくるーつのまゝ
まれてうくおよ
ゆゝーきゆ　わ　居うあうう　鋼　の

おもゆ　祝り　筆　おゆう　持　佛堂　よ　仏　の　お
かれ　花　載　よ　石　ま　ま　の　お　ま　お　ま　ま　よ　子　読
の　お　ま　人　よ　あ　の　く　詞　の　ほ　う　ま　文　よ　作　者
お　く　ま　の　ほ　く　ま　ま
う　ぬ　ハ　文　車　乃　文　墓　塚　の　ち
ま　よ　ま　り　作　ま　車　ま　ま　ま　あ　い　な
き　り　や　お　く　ハ　ま　那　庵　ど　ゆ　り　作　ま　を
ま　く　人　ま　ま　を　ひ　ま　ま　て　年　月
遊　境　も　へ　ま　を　ひ　く　ま　れ　ま　う
う　う　ゆ　て　ま　う　う　め　れ　て

やてみるとまぬみらしのおのよ
いろいろ事ありてうちまれ人ぞの
ものしぬて井をろ所のうち
そこそこしまろ人は文よ伝もおもう寺
ものまきくと思ひ何ものをうろ
ものひりのあるうちおくをつり寺
口よ四ろ要ていたすハやてうれ多
事とこたの又独をまもうう長
心ひりう人のうりまよ鼻ぞ所
おこのうちいう長人のうもをよハ

あるすきよくたくあこうちあかうさく
しぬうきを去ひりつまくあきく
うるうをうを長おうをろきまひり
ひっぬの面たうりいをれぬうを
ぞを人いうをあるうを寺みる人ぞ
興をう屋ぞハ独をまをうをあを
いをも詮をくこをみうほとう
徒人うひへをれていを定ぬて
うををくををうをあるよ毒ひり
ぞつをうあるうひうぬるみをよ

笑たるよりたゝへうすゝ下ものの
人のおろかハ耳おろく事のこたり
ゝき人ハあるしうきゝとゝすゝ不くき
いゝて仏祖の奇特ハ祖師者の伝記のこ
伝をのゝつきゝをゝ行ゝすゝもまた世俗乃
庵言を移んとろゝ伝しゝゝをおもま
しくゝをもあしなゝゝも論るれハ者ゝ
をゝゝしくあり〻らのゝ偏り伝きす
みゝゝいあるけゝゝへゝす
議のゝくゝをあり〻まゝく東西よりゝれ

南北ゝ当たるれをゝ一きたり
老ゝあるをゝつゝ行所たを毋有
ゝよりゝ知ゝたくいゝれむ仏行ゝ
生死ゝ利を求てゝむ何ゝ才を
ゝ一ゝ何事をゝまつ初ゝ愛只
老と死ゝよるこゝ学ゝ事をゝゝゝふゝ
念この月ゝゝまゝ寸是をまつあゝ
行ゝ女ゝ一ゝあんまゝつゝものをこ
きををゝし寸ゝ利ゝおゝきて先途の
ちゝれ月ゝつゝ月をゝ行ゝをゝ

人の是をうれし悔悟するんことを
ひとへに衰紀の理をしるべかり
つまづいわ方人をいかりもろもろん
まことのかなくなくひとりあるのこと
ろうよけまこと世うりもろこへを心の苦よ
うつくしく面もいやまく人よ面もれて
詞ふるのこうりもろひもこまるつる
あるす人りたうれをあうりたうろい
一生いうみ一度よろもよ者の事
定まるうれ別みうりよおもりく

得失なむ河内国もものとよもつり
酔の中よ夢をるすうつまくいをいく
かりくもれうろと人れくのもく
いまる面ろのみをしすをを孫を
まれまるを国すをあづうをて
つをやまくきんうもたくたの三ふた
ひひへけまを話人事後能宮向ホ玄
諸孫とやのよとうを唐福正観を後進
春のありまれやうるあうり歌を
悦もたるくん方ゆようる悔中よ

りゑ法師のまことにこゝろをいれてまゐ
らせたりしかとも世のつねのこゝろをも
ちたるまことの法師にはあらぬ人にて有なん
事よ其の比人のもとにありしをも
ひあつるまいらせたりしたにたらぬ人
のよく案内(あない)をしりて人まゐりをも
ひこゝろゝゝそゝけられひとりう
こかりもりひりゑ法師をもう
をの人をうへハワたるこゝろをいそ
ぐもりハたりまんとおもひゆるまゝそ
ひたすらまゐ
ぬ所やの事をもとりこゝろをひを
ろかもくをすこゝろをみけられひ世り
こと力りたるまゝくしぬ人いたるとも
いまゝゝの人をもあるかもとり
ひつけるこゝろをもくるおのゝをもたるえ
ゝゝゝゝゝゝいうゝ日足あを
ゝゝひりて心しぬ人ゝり心をす
あをいまゝる事をもれすよゝうぬ人の
うりりすたるゝ事

何事をも人にぬすまれぬる所にてよき
よき人にたのまれる事ありて
かりやいとまを出る
人の家のものをうばひ
とりてまれにふたつ三つ
もあるをうばひとりて心にまかせ
ぬれなりよくはつまへたりは
心にもくとはぬうらをいたぬる
いらけき
人ぞふ物すきのうらに事をのこす

あるう法師はかたをあらためて
えびをはらひくをしてら寺仏法知る
きゝし連歌しの管絃をたしなみあて
えをろかりをまうをとして物
人すきのあるはしめて
法師のこゝをたつ上達部殿上人
こゝまでなりなをて武をもつる人おかを
百をひたうひく百
武勇の名定こゝ所八宮上家て
あるをとゝ武勇者あり寸とゝ人は

共つゝ矢きハまりゝつゝゆゝ歌ゝ陽ゝす
死をやまゝてゝな始てゝをあゝゝす〳〵
ゝゝ祝ハ武ゝりかゝゝゝゝゝを
人倫ゝゝゝゝ令歌ゝゝゝゝゝまひを
あゝゝあゝゝゝゝて益ゝゝゝ事せ
扇ゝ障子ゝゝゝゝゝ字ゝゝゝゝゝゝ
筆ゝゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝを
有ゝあゝゝゝゝなく見ゝゝゝ大ゝ
もてゝ調度ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝす
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝす接きゝゝゝたゝゝゝゝゝゝ見
ゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて用ゝゝゝ事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝく
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
螺鈿ゝ柚ハ貝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一部づゝあつ茅葺なるものおれり　やうりを
あつめを見るに　いとゝ弘誓院の
必一具りゝ　みてんまつ　なさ
もの　まるゆせて不を　ゆうゝそよけまと
ひもしみく　見しれりまつを
行と皆事のゝ　のりまつはたり　ゝ
ゆりたれ　ゝとて　所置　ゝは
おりろくいきのぶる　ゆせ門宮造ゝて
まと必作りてぬ所をのたんゆせと
或人戸物　ゆり　先賢　作まつ門物の

文まと蒙院のゝけゝるゆのをゝを物を
竹林院八道尤大殿大殿よあゝを
行りんゝ何のゝをゝりたゝをゝ
ゝをゝ作ゝ事　一上　ゝや凡
なんて出ゝ　始よ行り洞院大殿
殿ゝゆを月心しゝ行ゝ桐園のゝをゝは
をゝと行り元龍宮悔たりとゝや云ゆ物を
月ゝて殿ゝを和盟よゝてはをとゝ事
の事ゝの作ゝ　ゝりゝをゝれり
ちゝをゝ

法形三義の天然より流りて出て扇を
見るがごとくに病より脚てハ漢出食を
ひらい紡ぐ事をすることなりて人の
世下よりて心より起る氣分を人の国
を紡げると人のひらいよ仏融信都
優り情あり分ち三義乱れとひらい
て法砂乃やうにすることなるよ
くなりしの
人の心をなかなるひらいハ偽りよりを
あるすなれをまつるる亜の人なる

なるんをのきるるおかりるひと人の賢を
みくるやむハ易常りるりて愚なる
人ハたまく賢なるを見て是をく
むなるきりる利をうるんるるよするの
利をうけを偽るるるるるるるるる
とるるるのきる心りたるるよるるる
什朔をするるるるるる兵人ハ下恵性
うるへるを伝て小利を辞をるるす
るるるを賢をまるるる物人ハ
るて大路をるるハ則物人也恵人のる

そんをとろさハ愚人也 蘭を佩るゝを
蘭のたゝい葉をまゝハ葉の徒なり
いつゝりても賢をまれたんを賢とも
惟継中納言ハ風月の支よりゝ人なり
一生持遍ゝゝ講堂らして寺法師の
圓伊僧正と同者して物まゝよ文保よ
三年ちやうれ町坊立よ遍ゝ田坊義
寺法師とゝゝ中つまとちゝ及るけまて
義をハかゝしやをゝゝ中ゝといゝれ
りゝゝ秀句ゝ句ゝりゝを

下部よ酒のゝゝまゝ事ハつゝゝき事也
宇治よ徒侍ゝゝを京よ奥覚坊そ
なゝのゝゝゝ遁世ゝ信をゝゝりゝゝ
けまを者よゝ心つゝゝゝ或町遠よゝを
ゝゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝのをのこゝゝ一度きゝ嘆よゝて
酒を出れをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たのもゝくゝゝゝゝけるれて
ゝ情の徒ゝゝ者ゝ法師の者士あゝゝ

なりてあるゝよ此男たちむうしく
日暮れぬる山中よあやしこそとまるへ
しかく太刀をひよめかけまて人なる
太刀なき矢をけあるゝまゝと奥覺坊
ふまりてゝ心なく酔ゝる者あ
まぎてゆゝ結ん[illegible]といひけまてを
のく明てゐぬ武男奥覺坊よ遣て南
坊ハ腰まし行ゝあふをあき酔ゝ
ゆゝ寸言葉仕ん[illegible]をぬ行方
むれしくなし行ゝ行ゝくいうて

ひゝこゝふこゝをおゝつて山をゝ
ゝをけきて里人おりて出あて
我ゝ山ゝよゝひくゝをゝつて
こりまゝりきゝをあまゝゝてゐる
行こゝきゝ出ゝり行ハ血つゝ宮治
大路の家よゝゝを入り清まゝゝ
ゝのこゝあまゝゝゝ見ゝゝ
具覺坊ハくゝ明ゝあゝ明ゝを
求出ゝゝゝゝゝゝき表ゝゝ
腰ゝを換きれゝゝゝ明ゝ

或者小野道風のけう和漢朗詠集
て書うつしまをあるに人に相伴うまうけよ
仰しなれしを保大納言攝津うものを
道風うん事時代やたい物の事
おかりかりそこいけまてさいへて
うう去よたをかきわ侍けまそて
いよく秘蔵しこうり
奥山り猫まそとしてあたりそんを
くうなすと人のいいくるよ山をひた
もりまを猫の強あうまて猫まそ成て

人をうすはあるおとを云者をくるを
何河阿波佛とや連歌しまうけ師の
行脚寺乃色うりたをくるつて独たりん
ヲハ心正人き事まうと思けるれしも
あるかまそ枕うまく連歌して是程
思まうり小川乃をうまく言よこそし
猫まそあやまそ寺見あんすをうこそ
やそうりまうりうものかをんうん
ます所四をう勝てうをんとすうり
力を好見したをを小川へうひつく

たまけるを猫まさりやくをこれへ
あくしまと松しまとてしまとて
見まをあまりよ見まる信形り
こハいよりて門の中をいろ北おを
ふれを書あのかをめ乱て扇小箱をを
懐よ移ふをくもゆよ入ぬ希有みを
たまをまるこ段まくをまくをあり
入よくりこい書ゆ犬のくをれをぬ
をまりく飛つきたをまるをそ
大納言法京の石つ仏ひし露ぬやまを屋を

ゆをのを書りをつ移り行かをひり
或時出て四条ゆを法京ゆ行つ
りと同しこハやまを屋のを屋をを
やをゆをのやけを屋八男の法師ゆを
をこれく神ゆあの場ていくゆ見ぬ
をハ見らすと答ひきをを彭をり
のをひりをん
赤舌日と云事陰陽をを屋ゆ時を
むしの人見をいまをの比行者ゆ
出ていををゆけをりの日あを事

未練すといひきこえし日いとりしゆ
えとりし事うるすえうりしをも
失いつ念たりしまて事をすとをろの
や吉凶擺てれうりの赤をぬを
ものをうんもみひとうりてこを有を
常変易のこひるとみりのも有寸
始行るすも終れ志ハとけを望ハ施を
人の心不定れりおの幻紀をり何ゆの
ものをりく宿をもの理をしをれれり
吉日ハ悪を寸ハ必凶れり悪日ハ善を

をこをうりかるすを吉れりやをつをり
吉凶ハ人ハををくを日ハをうす
或人引いる事ををををうもろ矢を
たををみく的うむ師の云神心の人
ををの矢凶ものをなるれなの矢を射て
をものの矢ハ吉凶りの心行り毎度只
得失れ迷一筋ハ定てと思へとも毎
月ッり二の矢師のおをひをを
をろをせんと思をしや怠の心をうう
知をとへも師月を考けを毎め

美事なりけるを宮ゝ人々は
知たるなりと思朝夕あんずを思て
うつゝなく愁り侘ぶんを効すいたや
一剣抜のらるゝ毒の心を事と
志らんやなんうそ人の一念をもく
きゝちまもるものの悪うゝ
牛をうれ者たり買人あすのたゝひを
やるく牛をゝらんとしまのまゝ牛死ぬ
うりんとする人は利たをうしんかをもう
人は撰たりとおもう人たをれをもく

うゝへ物ゝ者のいたく牛の主ゝ
撰たりと以をみ大物ゝ利たり をあを
生るもの死のちゝ死をを知ゝ牛
既は志の物り人のおもりたるゝ
牛は死したるゝ物は存
一日の命万金ゝをもし牛のあゝ
鵝毛ゝ恒し一万金を以て一疋を失ん
人撰たりとゝすゝ人
あゝりてを思はゝのゝ
ゝすとゝみいたくゝれを人死を

ゝまハ生死を捨て解脱よろこび
ゝきよたのもしきゝんや思ひ入こゝ
たのしひをまなぶ事ハ
外のゝしひをゝるゝ賊を忘れ
あらゝく他の賊をむさぼるゝ志ゝ
事ハ以ゝ万事を捨て
死を除て死を恐ゝ理あるへゝ
人皆生をたのしまゝゝハ死を恐れゝ
ゝ死ハ死をゝれゝよハゝす死を
ちゝ死をゝゝ生死の理

ゝ寸といゝ寳の理をえゝり
ゝてゝゝゝゝ人いよゝあさきゝ
堂鐘并 和國出仕ゝ勅書を拾
ゝゝ小面あいゝりゝゝ
を和國なゝ小面をゝゝハ勅出を拾ゝ
下ゝし給りし者ゝゝ者いゝそゝ
君ゝ作ゝまゝりハ
小面をゝれゝよゝ勅出をゝのゝ
なゝゝけゝ見
ゝゝ寸とゝ

若のくりかへる時を付事つゝたつけ物へ言うとあり有職の人よりの
戸物反物袖よりつき表紙よりつゝる事
無礼なる事なりいまも親切文の義
あるべ右よりかくよりは若反袖よりつゝる
つゝみの事切りと作り書
のなりとゝよりまゝくゝりたるよりこれ
ゝゝ人彼筆をもつく付ぬれはまゝゝ
いけとなん見知てゝ
書物よ付くゝをおを費しそこまゝよりの

報を知とゝ外よ風ゝあるよ聞ゝ国よ賊
ゝ小人よ賊ゝ君子よ仁義なを侍よ法なり
たゝゝ記ゝつゝの書ゝ付ゝ一言等涙とゝやゝつゝ苦
と見物よ心よあゝ苦しゝ事
一 去や世間一きんやたゝまゝと
事ハ却やゝハせぬよゝ
後世をおゝたん者ハ想粗一を物
一言の持経本尊より是ゝ
よゝおゝとゝ

一 遁世者ハなきことかけぬやうを
てうしのくまもなくまぎれこのやうに
有なり
一 上鶴ハ下鶴よりなり智者ハ愚者より
慳人ハ貪りなり能たる人ハ云能
りなるへき事なり
一 佛道を孫子と云ハ別ち事なり
いとなあるなりくまの事を心よ
うけぬを出一のろこと
此外もありし事共なり

堀門相國ハ美男のなりき人なり
こと事なるをもの事を知行ハ
墓後つを大理よりなり廳勢をこなし
なる廳屋の唐橋ハくそうそう
作りあるなりこうらいおもしき
きるよ代唐橋ハ上古よりを作りこと始
をこすす板百色を陸奥国累代のこれ古歌
をかりて規模とすたやまくたりこれ
なきらし京家の清官ホーけきこと事
やこりなり

久我の國は厳しく水をとり来りて
主殿司を遣はすべきを
もよおして国司を遣はすべきを
或人任大臣の節会の門鞘をつとめられ
来る門記の拍子宣命をとりすして
堂上に来る事は世の失礼なれば
立腹とりへきことなれば寸思ひ
来るよし伝門記康綱ゆげ示の女房を
かたらひて彼宣命をとりて思ひやる
なりとぞ聞きり

平大納言光忠入道近衛の上郷をつかは
らまき来りて洞院右大臣殿より所を
請られけるを
命の光いかりをのくまひ給うの
みあ部は老たる法士のように云事は所
者なるとて
状を云て命記をめられけ
けるは先状をめられ
のいやうにかきをくやいかんと
を
なりり

大学寮に学ぶ遊習の人ども多くて
作りたてまつれる歌一つを忠孝の
名り者なる侍従大納言公明の吾朝の者
みぬ忠守ぶとあるをせられよとて
唐紙ども多くとりて
服部遠出よりいあられけれども
意ある者の人の娘なる女をうれ事
あるもろもろつまくをせるをぬるを
或人ひとりいんそ夕つくよ宮
あるつれ物語よ世のく弱おり多くり

大のもろくしくとむまいを女出出く
いつくもとうとりやて楽門をこ時ノ多
入行ぬもろほそ事れ物たり横いて寺
らんといをもろもろ新まり ちやーこ板敷
り出りーたら行つをもくもつろ
きりのるやりれてもれるる人
あまたたくあけ所きけれる遣戸まで
入行ぬ門の門ハいくまりーうう
すもろよくく火ハあるうりあのもれと
おのこうなとみて物をたるぬ

白いと高のつゝ伊勢より門よく
こゝてよ面をそゝ[illegible]
[illegible]代の人を書こゝ
やまをいをぬへつゝ[illegible]
[illegible]ほとゝ[illegible]
そゝ[illegible]の事をも
[illegible]
まゝの[illegible]
[illegible]
をなをりやゝ[illegible]

へき所の[illegible]
行つゝ[illegible]
事なゝ[illegible]
[illegible]
曙[illegible]
水のおもよ[illegible]
[illegible]
小の[illegible]
[illegible]
[illegible]

段々ハあるゆゑ人てるれなる南堂玄
庵よりなるく段々行すとみゆる男女と
なるべしよりまくれ物語を見ること
行るやうなりたんつよを降まれうか
なるもいとらしやをみてえをいてる
匂ひのことくほりたるこそたりけき
きりしれをまくすたるをゆし
高野の禅定上人京へのぼりまるゆ細道
みくるゆ京ゆるゆ女の行あいをりけるう
口川ゆ男なりいてて聖のるを堀へ

おちて行り聖いと腹たくこうくこハ
希有の物語ゆ聞ゆ郭の井ゆたるれ
比丘ゆ比丘尼ハをゆ比丘尼を
優婆塞ハをゆ優婆塞ゆを優婆夷
ハをゆ女ゆ女の優婆夷なるゆ
ゆ比丘を場へ跳入ゆ未曾有の
函の物ゆいれけをを口川玄男
いゆ物ゆ新やゆ見えゆ者ゆ
つよ上人ゆ言いをまて何をゆ
非僧非学玄男ゆあらゆ

こゝはまことに故言しつと思ひ給へこ
みくるひとしてゝ申さまつ給たり
とゝ申けるこゝはなるて
女のおいたけ給へるかたちあ(すよ
こゝ祖りまつる男ハたりかるこゝ和そそて
愛山院花洞院大殿河内寺
男達の年ゝ新こゝ小河寺や中絶へこと
四て心ゝ思ふまゝ給へるこゝりまふりの大納
言とゝやハ報申ぬ分ハえこゝひますと
答られ給へり堀川の内大臣殿ハ岩倉寺
ゝ

ゝてのゝりゝやしんと作ゝまたり給へを
ゝまいハ報申ぬ分ハ報申ぬ分ハ報申ぬ
定あられ給へりまつてなのこゝ殿ゝりの
らられぬやゝりゝ給へりゝ給へりてこゝ
清水寺兼南白殿ハおさめて安楽院
のよくなゝ(まゝりせこゝ殿行きるゝ(へゝ
伊勢詩人ゝのよゝ給へこゝ人ゝ作ゝまゝ給へゝ
山階左大臣殿ハあやしゝの下女ゝ見給へを
いとゝゝゝ心ゝゝゝ給へゝゝゝゝ
作ゝまゝ給へゝ女ゝ乃ゝ殿ゝ給へゝ

冠もいふをあまたつくろひ人をたぶらかし
つくり人よ取まぜまぜ女いうまりいつみ
わうと思うり女乃性ハ皆ひつり人我の
おもうゝ貪欲甚しくおの理をしらす
たゞ面ものうとこと心をとゝめくらかり
詞したくをよくまぜ
とゝ時をいとゝ用ゐあるうとみ度又
清まし事まゝくこゝ守かりうりい
出を物ゝたをうをかまるうハ男の
智恵うを面ゝうるうとこををゝ

あとうをたゝてをしゝすをれかる
らすして拙ものハ女ものりをまるよ随く
よく思をれん事ハ心うゝ為ゝをれを
何ゝをゝ女のをゝ賢女ゝをを
をれもおうゝををまゝうをなんをゝ
面ものをたゝうゝてう徒よををよ
時やさゝをゝをゝをゝをおかハ
事ゝり
寸濁ゝむ人ゝりををくをゝりの
通ゝりう愚みゝををうを人ゝをよ

いく一様のろくもくもれをかな
ぬきてまりしさんをとめる人とする
ふしハ商人の一様をもむ心切なり
剣形おわしずくもくもれをたちのく
やまぐれで命を終わる初たらまちまちの
ひまてそさ人いとく日月を惜へうす
只今の一念む形くるる事を惜て
も人なりてあいのちあすハうまう
失りてと告しらせたんよきの
くもあひくいるをたのを何ようを

いくなまん秋ういきるきの日なんう
其の時節よくなるん一日のうりう
飲食住利睡眠言語行歩やむうを立す
ーておるの内をうこをあまりの暇
いくくなるぬしらを益の事をれ
云益の事をいい益乃ようれ思惟して
内をうをのくなるすりれ消し日を亘
て一生を送る九をろうれり祈重運ハ法義
筆愛なりしうしく心ようる風雨の思を
親ぢうハ恵遠自道の交をゆうさてさ

志りくをしれ時ハ死人なれし光
陰(いん)行のさめりつおしむとなつハ内に
思(し)通(つう)れしかに無事なしてやま人ハ
止(やみ)將(しやう)きん人ハ將でよとれり
高名(かうみやう)の木のぼりといひしをのこ人を
おきてたかき木にのぼせて木末(こずゑ)を
きらせしにいとあやうく見えし程を
いふ事もなくておるゝ時に軒(のき)だけ
ばかりになりてあやまちすな心して
おりよと詞(ことば)をかけ侍しをかばかりに

なりてハ飛(とび)おるゝともおりなんいかにかく
いふぞと申侍しかバその事に候
めくるめき枝(えだ)あやうきほどハおのれがおそ
れ侍れバ申さずあやまちハやすき
所になりてかならず仕る事に候と
いふあやしき下(げ)﨟(らう)なれども聖(せい)人のいましめに
かなへり鞠(まり)もかたき所を蹴(け)出して後
やすく思へバ必落と侍るやらん
双六(すぐろく)の上手といひし人にその手だてをとひ
侍しかバかたんと打べからずまけじと

うけへこさせうきのよっく負ぬこと
業してうのよをつっうすして一の成た
をそく及へこさるもの作てとうをを
ちまうをすへ子を治め国を保んをも
み志のなり
国基双亡ぬてあうしうす人ハ空虚
み逆うをまうれうる恵事をおうと
あうり事あうし事再ようまて
みくおうく作う
ぬ日ハ遠国へをもむくてやきうん人

人ハ心静よるをへうん口さを人人
ていけてんや俄ちをいとなを
切う欲くうをあう人ハ他のをを人を
人の結長をもと守こうたをなくやを
うむう人も作うれをもやうけ行
病をまけうれいうんや無ものうれ
多ハ人み是よおれうて人うの
儀式うけまの事うを去ぬ世俗ハ
もうかこうを随て是をうれうすを
称うもおうく子も若くいうを及もを

一生ハ雑事の小節より出へ所なくむな
しく言なん日之言樂を吾生涯ハ
弱冠より諸縁を放下を以河内伝
ゝ事なし礼義を思ひ心をも
えさらん人ハ和性しいとなり情な
しゝ心へゝ法ゝ法ゝ
知ゝ法ゝ入し
四十ゝ人の色ゝ
ゝ人ゝ悪ゝ
ゝに打出て男女の事人のゝへも

いたりゝゝゝゝ行ゝ見ゝ
けきゝゝゝゝゝみゝゝき事
老人の弱ゝ人ゝしまゝゝく奥あゝん
とゝゝゝゝゝ教ゝゝぬゝて老の覚て
ゝ人をへゝて好ゝ
まゝしき所ゝ酒宴ゝ
とゝゝゝゝ
と出門のゝかい夜ゝ
有栖門のゝゝゝゝ
ゝ世内年を過ゝ

前板まてさてうとをる則市車の
ちりよいをうの帝有の童ふうれはて
市牛ををとわうといをりけをを
おかい厳市乗たうくりてをれ
車やんうやさいを丸ょ函さをを
帝有の男りうて市車ようをを
うあてうれよををうをの宮さいを丸
お泰敦のおとこ料の市牛匂をの
うげまを敦よ御をうを敦の宮を一人を
をうをを一人いををうをを一人いををうを

一人いををうをを付ふれをり
宿河原をうをををををををををををを
ををまりをを丸不の念佛をやををり
かをを入をををををををををををの中よ
いをを坊をやほをやおを寺を
ををりのをれをを中ををいをををれを
ををくのををまいたをを答をを焼字を
やを者をりをのをを阿をををとやを人
東國ををいをををとやかをよをををを
をりをを承りをををを人よをりをて

堀戸さいやとおりて
いろ〳〵おりて
こゝ事物ゝ寅
場をを〳〵物へ
あゝ〳〵こゝ門
足つよ行まあ
仏事の場よ物
二人ゆ京へ也あ
つゝ也よあゝく
かゝくこゝよゝ

迦世ゝかゝ梵字漢字なゝ云々者
こゝゝの門りゝゝ
似て我物ゝく佛
闘諍をゝゝす般
死を怪くして
いゝゝくむゝ
ゝゝけ物ゝ
寺院乃号こゝ
作ゝ事むゝ
年ゝりのゝよ

ゝゝゝゝ云ゝ者
ゝゝゝ
ゝ佛ゝゝゝ
般若ゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

はたらく業をなす学をあらはさんや
きらきやうきちゆうをもつて
人のえらびなしぬる文をつくるも
益なき事なり行ひもつとしこゝ
ともとも異端を焼清浄の人のつゝ
ある事なりとう
友とするにわろき者七ありとて一友をもつく
やん事なく人二ありハ
病をすつる人三ありハ
武くつるを共六ありハとする人

七ハ欲ふかき人なり友三あり一ありハ
わらはる友二ありハ
鯉のあつわらひる日ハ饗をまけども
なんりつハりもはくられのるまて
称をりをわりて銘をうてうて
苟もこゝもこゝ彫おるれハやんつみ
魚肉多き友雑肉ハ
尊なる友ハ湯殿のうへりうをうも
くくハすこゝ外ハ心ゝ此事也中宴の
ハ方芝ハ湯殿のうへ乃くくと相よ有乃

八ツ時分を小山八ツ屋の門ちかくて俗
をはなれやうて山ふかき所のおもむき
を姿ふかく山桜よりそいしの中見ゆる寺
門あり三つ巴ちらしたる人の家
をぬれよりてなとやとりたる
通舎人海ゆりうをを立魚ハ枝さうひりハ
ゆ形ゆおもくけ比あきをすりのなを
おもしも通舎人のうしをの中物ハ此魚
をうをうりうりうをうりしに世まてハたるしに
人玄芳ハ出事物語さきつゝハ不動も
く今ゆゆゆゆゆて物ゆゆ物ゆゆ
うのおもをあのをおもをおもをとゆま
まてもハをりうりうをうりうを物ま
唐のおを菜の外ハ物ゆゆ事かゆ
玄ゆゆハ比国ゆりおゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
たやをゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
つゆて所ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆおを寞ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
たゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

やーるいるあるは馬牛つるこうー
むるうそうまーれどるくくゆるる
わなれいうはやんだいまりとせく
つるんりを後うるとうれを必あるて
されるあるれでるくこうよ
もるうを守うるたるんこるかの多獻
まへて用ゆよりあり走るけるるを
樞りるくうりを乱れ飛多て翅を
こうを籠よへうれくをるい聖山を思想
むゆ川ーー喜恩我がうりあるて

世へうくは心あるん人是をたのまんや
生れるまりて用をよろこりむるを
祭祀の心りりを獻の多仏世ー林よ
多物をみく道遥の友ーこうへ
くまりめうりあるる寸低ーうー多
あやーを獻國りやるりやうる
をりを作るれ
人芸能はをあうるりて聖教を
ーまるを寸一ると寸次よはよこうく事
むるうまはりくを是とるるを

学問したるたつ次ハ醫術を
習ひて身をやしなひ人をたすけ忠者の
たとへと醫ハたつすハあるへし次ハ
引衆百工の業事ハ六藝よりもせりあり
是をうるはして文武醫の道ハ
かゝるをたつへしすでにこれを学ひ
ゝ人となりて次ハ食を
人ハ穀物よりよく味を調へたるハ大事
穀ハ次ハ細工よろしく要あり
けかの事ハ君子の所為ハ
侍ハ
忠信ハ是をもくすとしこの世ハ
是をもつて世を治る事ハ
物ハ金ハ重ハ
忠の物ハ
学益ハ
人ハ僻事ハ
忠ハ正事を
身おこり
人の

侍ハ
忠信ハ是をもくすとしこの世ハ
是をもつて世を治る事ハ
物ハ金ハ重ハ
忠の物ハ
学益ハ
人ハ僻事ハ
忠ハ正事を
身おこり
人の

いとなむ所第一は食物第二は衣服第三
は所住の人乃大事はこれ二ツ
統すべきなり風雨寒暑をこれをしの
ぎ病苦を侵されぬ為の慈悲
醫療を三へ薬をくすべ
求ることをまつしきを
とりすけ貧の事を
憐とすべの事 倹約をもて
これとせん

是法師は浄土宗よりすとつてく
学問をそなへ貧人に施してやをの
ぶるなり
人をまもる軍の法の如きは或世を
治し仏の法にして諸人を
なつけ導師のつとめ
ひとしたがへ
ぶると感じ
行ふ人あるほとに
うへをとつてよりしさう

おりかをりうるはしき等閑のほめやを
あるるよみ人しらず酒をむらさきをれ
をたつる人よ志ゐなしうする剱とて
人をこゝろとまるよ例うるゆせ二ゆふ
をつよろうるものなれそりうる時まり
我頭をこうるよ人をねえこうぬれり
をのまをを酔て別をを人をよををを
ア言剱みをこうをとをうををりまうや
いとたしりかりき
をうの員言ハまうをくのをりをうら

いまんとをんうりあのをくハうりへうす
立うつりぬまをく時へ三河の国ゆをと
をうつ(て)をを河ををしうををををうと
又ゆりと或者ア言
あるたのをく益ゆよ事ハたうをゆを
ゆうとする也
雅房大納言ハ者うをををを人をを
大将ををなををやををおう者ゆ院の
巡習をう人ア言清をこうゆ公ゆ
ア言れ後をて何ををとハ後行後よ

雅房卿奮よりてつき合ふ大の
けをなり物つを中垣の穴を見
物とやうしくるようとまくくよく
ありしてて日数の間氣をもたい
昇進も志ハこうをくりさいるの人奮を
ふまたり者ハ思ひ寄るれと大の見ハ
あとはよ事ハり虚言ハ不役なれとも
ふれすとき後ふまを物者
君の者ハいたふれ事也大ふ
いふものとふたりそ

あふい女のまん人ハ畜生殘害のたふい
ハりよふの多獣ちいふれ
ハをとうてふれをみふり子ハおふい親
をなふくふ丈婦をもふい物を
いを欲おふすをふ氣を惜ふす
ひふよ思癡ふふれふ人ふ因ふく
悲しなよ苦ふをあふ命をふハふ事
いそふまふ一ふふんまふく一
切の病をふく急逝の心ふふんハ
人物ふたふす

顔回ハ志人ニ労をほどこさじとあり
まつ人をくるしめわづらはす
やしなひ民の志をとげさする事をなす
みなしごなき子をいつくしみめぐミ
し故に恩ある事たりたとひし
人ハ恩をかけてもそのむくひをあらす共を
おもはよつねにうやまひてあそびく
まつしく浅ましき思誠ニ切なるに
是をあはれミて恩ある慈悲の心あり
あるまじき人ハ我よろこびハまを

これひとつハ皆虚妄なれ共誰か
実をみおり着をゆるがすやうにさし
つとめてまじきむかしハ人をそしる事
粗悪し病をうくる事をまぬかれハ心も
よくかくすこゝろ病ハまもりし薬を
のんで行をかなつりハ忠なしなさ
事あまりて一旦恥をうくる事あまりハ必
行をなす心のまへにありといふ事を
志て浚雲の志をのこし白鶴の人と
なりしかハよろしかるへし

ものよりそ分をまもるまをまけて人よ
まるこい彩子をねみて人をこたに
まるる度志子等のあるいまを時員を
ぬ人ハ時て奥あ人ためりをまつ
藝のまをまるる事をよろもこされて
反て奥ハ学問をよるもまるる
我反て人をよろこりて人と思て変よ
あるもの奥なるれて人よかいなく
あるを学く彩つをハさまるる徳よ
るむりむつまるこ中よたるもも

人をるるとあるむをまこう智玄
内をるるつを奥るる子是文礼よ行る寸
るれるりの奥富よるをおるりなぐる
うるるむまよたぐ面ほ面まれ
あるるものをもの心失ハ人よまるまんこ
るる思るる只学問してを智を人よまるに
やるるるみるを内るを奥るを善り
かるるするるるるよ行るるハるすて
つまをるるへき有ハ大ハ識をを
辞し利をるるハ只学問のるるハ

まつしき者ハ賊をもつて私と老ら
者ハ力をもつて私寺をのゝしりを
及ぶ時ハ速よやむを得ずして
ゆるさるゝハ人ハ恥あやまを形りを
たゝすして去ゆくをけむハまの
誤也まつたくをたゝこれハ
力おとろへをしらこれハ病をゝく
鳥羽の作をゝハ鳥羽殿のそられて
の号をなたゝす昔ゝの元良親王
元日の奏頭の勢ハ恐縁勝ゝて大極殿
ゝを鳥羽の作りゝまてすゝきゝ
書部主の記ゝ作ゝゝ
ゝゝおゝゝハ東南枕ゝ
ゝ湯氣をゝゝ孔子
東首ゝ作ゝ寢殿ゝ
者ゝ事也白河院ハ小首ゝ南寢ゝ
小いむゝ也ゝ伊勢ハ南ゝ大神宮ゝ
所ゝを南ゝゝゝ事ゝゝゝ人
ゝゝたゝゝ大神宮の遥拝ハ墨ゝ
むゝゝ也ゝ南ゝハたゝす

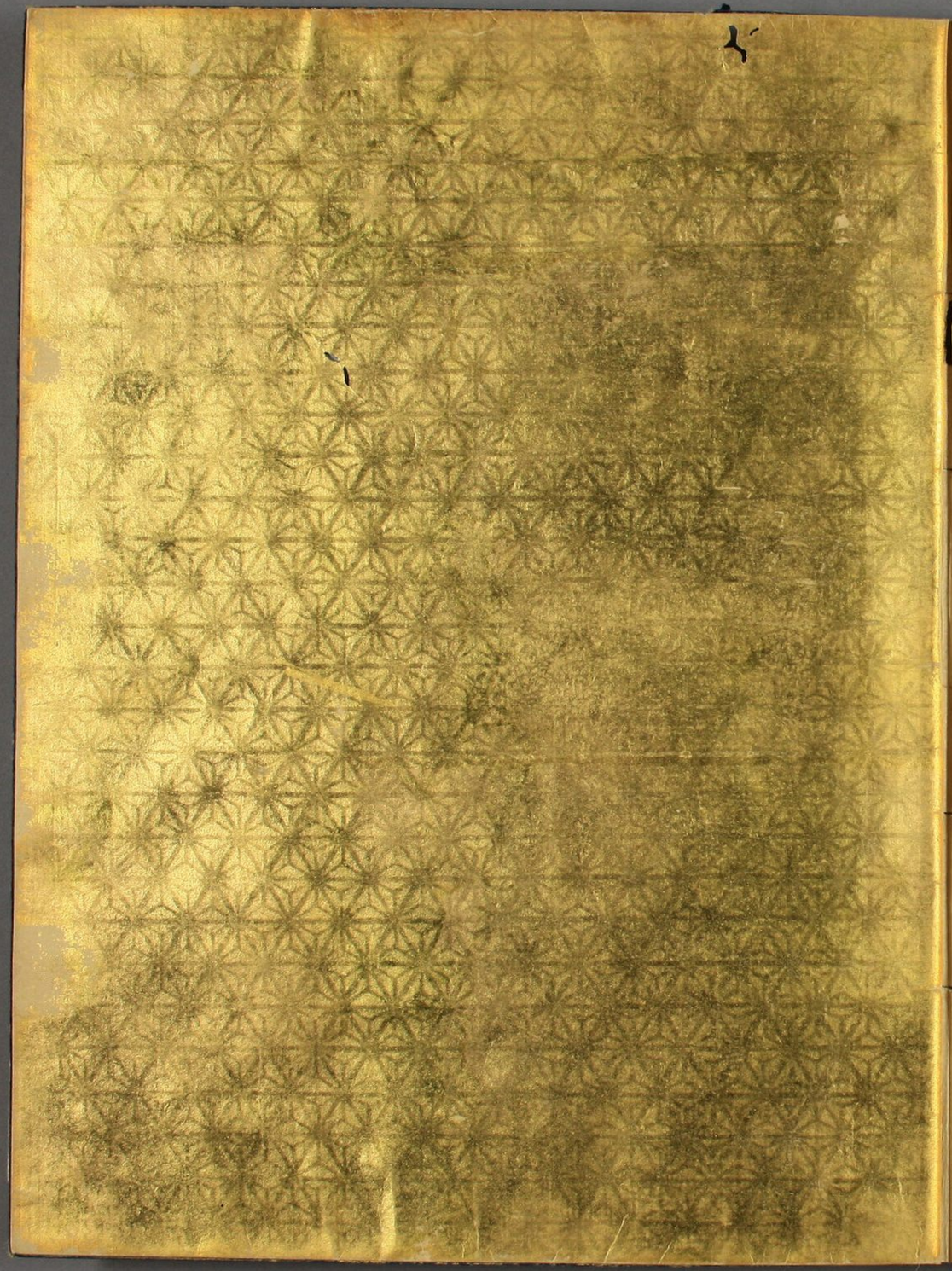
高倉院の御願堂の三昧僧なりし玄
律師とやいふものありけり鏡をとりて
かをのぞくに我ならぬもののみえ
けるをいぶかりて心うく覚えて鏡を
ひきすてんとしけれども鏡をはなれず鏡を
をもてなげうちすてんとすれども人の
手にうばはれぬ事かぎりなし堂のうちの
あらゆる雑具をもてなげうちすてんと
覚しけれども人のうばはんとすれば
をしまれぬものをとかくいとりあるに
つけすてんとおもへども人のうばはんとす
しすまのをろかなりけるをもすて難
かりけるをしすて難きをもすてがたく
すべきの道をもしすて病のをもすて
しをもすてがたくなりぬれば
なほ命のつきんをもたこ
非をしひたまひてかのそらをとりて
但しこれハ鏡なり三年ハかりをつくしを

多分の事しらぬ友だちひとまへき
るのあけまほしぬりいろをたうろう歯をかうく
いはまほしるをとをすりぬをしを
せよと友だちすりぬをしを
まんろうやてもろ老ぬもちで
なを雨よりをやまもせろ行をろう
明りとしらいろんを見を思事見よ
ろうろうまつをしん人よ楽きれ是て
流よまほしるを飛明りろう見よろ
心をくまつをくそは人を智り

して大戈りまほりぬ不楽の藝を
もりて塔能の庵りつる明り書れ
らをるをこそこを明る人よるひいん
やなるる事をのをこれをぬ事を
るまへ詩ろるをまち人よをれ
人り増ろは人へ去あろ飛りあを
むさるをろりひりをこうろりを
ろつむりせむこるる事のやまろを
氣ををよるちまる事い屋ちよこりりと
たりよをろこれを明り

資季大納言八道ゝやこもしまゝ人
奥氏宰相中将よ逢くゝもぬ のゝ人まて
程の身何事ゝ思ひを答ゝ遊んやを
いまれけまを奥氏いゝ物ゝんとゝされ
ゝをゝをゝたゝ物ゝ行てゝいまれをて
くゝしゝ事ハゝゝもまひゝを
物ゝ人ゝゝ人ゝまてを何とゝなゝ
ゝゝゝゝの中よおゝゝ物ゝをゝを
四ゝゝゝゝゝれゝゝまゝて実行の
あゝゝ事ハ物ゝ身ゝ思ひをあゝゝゝゝ

ゝんといまれゝまを通習の人ゝ女房な
ゝを奥ゝゝあゝゝ思ひおゝゝゝ物前
ゝてあゝゝゝゝまをゝん人ハ供物を
まゝまゝ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝをゝれゝゝまゝゝ奥氏おゝれゝを
ゝゝゝ物ゝとゝゝの心ゝゝ事物
むまきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝまゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝんゝゝたまゝゝゝゝゝゝゝ
大納言八道ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とをれいてまもたてすといをれけるを
わとをとをうをるハ志物ををるをを
弱をまんとゆるゆゆつとゆをれけまを
大納言入道まをよ物りを府課いを迫く
きをまをりけるをを
くゆあつをけ法皇の御前
ををひく供御のまりをよとまり
物を供御のいろくを文字を切籠をを
つをひをれををよ物ハ草
市場あをまを物れをひをとゆ

あやまを物しとゆ多時しを六条の
右門府まり好く有房つをよを乃
ををひ物んをを兄ハかと云文字ハ
まのてをよ物んとをれをとをを
去てをりひとゆをれハ女のほを
既をあをれをを人ハ物ををを
人ハ物をを府物りとゆをれ多を
ををよ物りて西をを也よ多